

日本自立のためのプーチン最強講義

北野幸伯・著

集英社インターナショナル ウェブ立ち読み

プロローグ
ベドメーラジェフに解任されたプーチン、日本へ！

●二〇〇九年九月、プーチン電撃解任！

●プーチンの策略

●プーチン、突然の政治家引退宣言

●元世界最強のリーダー、ついに日本へ！

●日本、二つの選択肢

第一講義 「孤立」と「自立」のどちらを選ぶか

—— 領土問題と外交政策 ——

●領土問題で四面楚歌の日本

〈プーチンと矢部の会話〉

●アメリカ一極時代の終わりが、現在の日中関係に影響を与えた

●日本を手放したくないアメリカ、日本を支配したい中国

●小沢一郎の民主党代表選後に凶暴化していった中国

●日中対立後、ロシアのメドベージェフが北方領土を訪問した意図

●領土問題対立の本当の「黒幕」はだれか？

〈プーチンと矢部の会話〉

● 中国は、米口韓を巻き込んで反日包囲網を作ろうとしている

● 日本には沖縄の領有権もないとして、沖縄も支配下に置こうとしている中国

〈プーチンと矢部の会話〉

● プーチンの公式1 敵と「戦わない」こと

● プーチンの公式2 仲間を増やすこと

● プーチンの公式3 「孤立は破滅」である

● 本当は世界中から愛されている日本と日本人

● 世界から孤立した時点で、日本の第二次世界大戦の敗北は決まっていた

● 日本孤立の原因は、満州国建国と国際連盟脱退だったことを思い出せ

● 日中戦争は、孤立した日本と、大国を仲間にした中国との戦いだっただけ

● 日露戦争での日本の勝利は、イギリスの強力な支援があったから

● 第一次世界大戦時、イギリスからの恩を仇で返した日本

〈プーチンと矢部の会話〉

● 韓国とロシアに、日本といま戦争を始める理由はあるか？

● いまの日本の最大の仮想敵国は中国である

● アメリカは日本の仮想敵国か否か？

● あえて「自己中」のアメリカと組まなければ、日本の未来はない

● 日米安保は、実際にいま役立っている

● 日米分裂をもくろむ中国の「畏」にはまるな

食糧の自立はどうやって成し遂げるか

TPPと日本の食糧安保

- 外国に「歴史の見直し」を求めるのは中国の「思いつツボ」—— 99
- 中国に勝つために必要なのは、日本が「集団的自衛権」を持つこと—— 102
- もう「保護者」と「子供」の関係を変えるとき—— 105
- 憲法改正が抱える課題—— 107
- 「アメリカ衰退」のトレンドで「日本自立」を成し遂げるには—— 111
- 〈プーチンと矢部の会話〉(一週間後)—— 114
- 「歴史の見直し」は絶対に要求してはいけない—— 116
- 安倍外交の成果と矛盾—— 118
- 安倍の「東京裁判は勝者の論理」発言は、戦後秩序への挑戦とみなされる—— 121
- TPPと日本の食糧安保—— 125
- 「TPP」参加は是か非か?—— 126
- 〈プーチンと矢部の会話〉—— 127
- 「関税撤廃」だけではないTPPの内容—— 130
- TPP参加で、国民皆保険制度と金融保護政策も崩壊する?—— 133
- 自国の農業を守るため、WTO交渉に一七年を費やしたロシア—— 135

「自立」のためのエネルギー政策とは

脱原発とエネルギー自給率一〇〇%は可能か

- 〇七〇八年、現実起きた世界食糧危機
——
- 食糧危機により、現実に生産国の多くがコメや小麦の「輸出禁止」を実施した
——
- 世界的な食糧危機は、また必ず起こる
——
- 〈プーチンと矢部の会話〉
——
- コメの関税が撤廃されたら、味・品質も同じ超安価な外国米が大量に流入する
——
- 日本国民の命にかかわる「農業の空洞化」が起きる
——
- 〈プーチンと矢部の会話〉
——
- 「洋食化」が、日本の食糧自給率をどんどん下げている
——
- 「完全米飯給食」が日本を救う
——
- 実証された、「食」と「いじめ」の意外な関係
——
- 「給食改革」で起こった奇跡
——
- 給食改革が子供たちの心と身体を変える
——
- 〈プーチンと矢部の会話〉
——
- 真田町の「給食改革」効果を日本全国に活かしたら
——
- 「食の改革」は医療費も減らす
——

- 原発反対デモにおびえる眠主党・田野
——
〈プーチンと矢部の会話〉
——
- 「エネルギーの自立」は「国の自立」に直結している
——
- 「石油」ほしさにアメリカが起こした「カラー革命」
——
- 戦争の原因は、いつも「資源」がらみである
——
- 日本は、なぜ無謀な戦争をはじめたのか？
——
- ABCD包囲網によって「資源」を封鎖された日本
——
- 〈プーチンと矢部の会話〉
——
- 悲惨な日本のエネルギー事情
——
- アメリカに逆らえばエネルギーを止められるリスクは、いまもある
——
- 国の安全保障は、常に「最悪」を想定して準備せよ
——
- 〈プーチンと矢部の会話〉
——
- 日本を救う「メタンハイドレート革命」
——
- 「油を作る藻」で日本は「エネルギー超大国」に？
——
- 日本政府は「藻油」の実用化に巨額投資せよ
——
- 〈プーチンと矢部の会話〉
——
- 「エネルギー自給率100%」を「裏」国民運動に！
——
- エネルギー自給率のアップが日本経済を再生させる
——

「経済成長」と「財政再建」をいかに両立させるか

アベノミクスの危険な落とし穴

- 二〇一一年、民主党の栄光と挫折 232
- 日本経済再生のためのプーチンの秘策 235
- 経済の「根本」を理解しよう①——景気がよくなるとどうなるか 236
- 経済の「根本」を理解しよう②——景気が悪くなるとどうなるか 240
- デフレが起これば失業が増える 243
- 不況の原因 245
- 不況を克服する方法①——アダム・スミスの「古典派経済学」を応用する 249
- 不況を克服する方法②——ケインズ理論を応用する 251
- かつての世界大恐慌で、ルーズベルトはケインズ理論をどう使ったか 252
- アメリカ経済復活の最大要因は、第二次世界大戦だった 254
- 世界恐慌をいち早く克服したヒトラー 257
- 現代アメリカも、「ケインズ」の有効性を認めている 261
- 〈プーチンと矢部の会話〉 264
- 「減税」すると税収が増える！ 265
- 消費税増税で日本経済はどうなる？ 269

第五講義

「核兵器信仰」は日本にどんな危険をもたらすか

- ケインズは「もう効かない」論の根拠 ————— 274
- 「経済成長」と「財政再建」を両立させたクリントン ————— 278
- クリントンの成功は「IT革命」のおかげ ————— 280
- どうせやるなら「日本の自立」を進める経済政策を！ ————— 282
- 〈プーチンと矢部の会話〉（一週間後） ————— 287
- 「アベノミクス」とりあえずの成功の要因 ————— 290
- 「アベノミクス」失敗の要因 ————— 293
- プーチンの落胆 ————— 295

- 「暴走老人」岩原の勝算と秘策 ————— 300
- 〈プーチンと岩原の会話〉 ————— 303
- 「核」を持てば、日本は自立できるのか？ ————— 305
- 核兵器は「現代の黒船」である ————— 307
- いま世界で「核」を持っている国 ————— 310
- 日本が「核」を持つとなにが起きるか① — エネルギーを止められる ————— 312
- 日本が「核」を持つとなにが起きるか② — 世界中から経済制裁にあう ————— 314

〈プーチンと岩原の会話〉

- 日本はアメリカの「核」を恐れないが、アメリカは日本の「核」を恐れる
- 日本がアメリカの属国から抜け出すプーチンの秘策
- 「ニュークリア・シエアリング」で、中国に対抗せよ

323 320 318 316

エピソード プーチン「最後のスピーチ」

327

- 二〇一三年、ベドメージェフ失脚とプーチン復活
- 「国家自立」のための五つの条件
- 「自立」と「孤立」の違いを知れ
- 「歴史の修正」を求めてはいけない
- 負けた戦より、次の戦に勝つ方法を考える

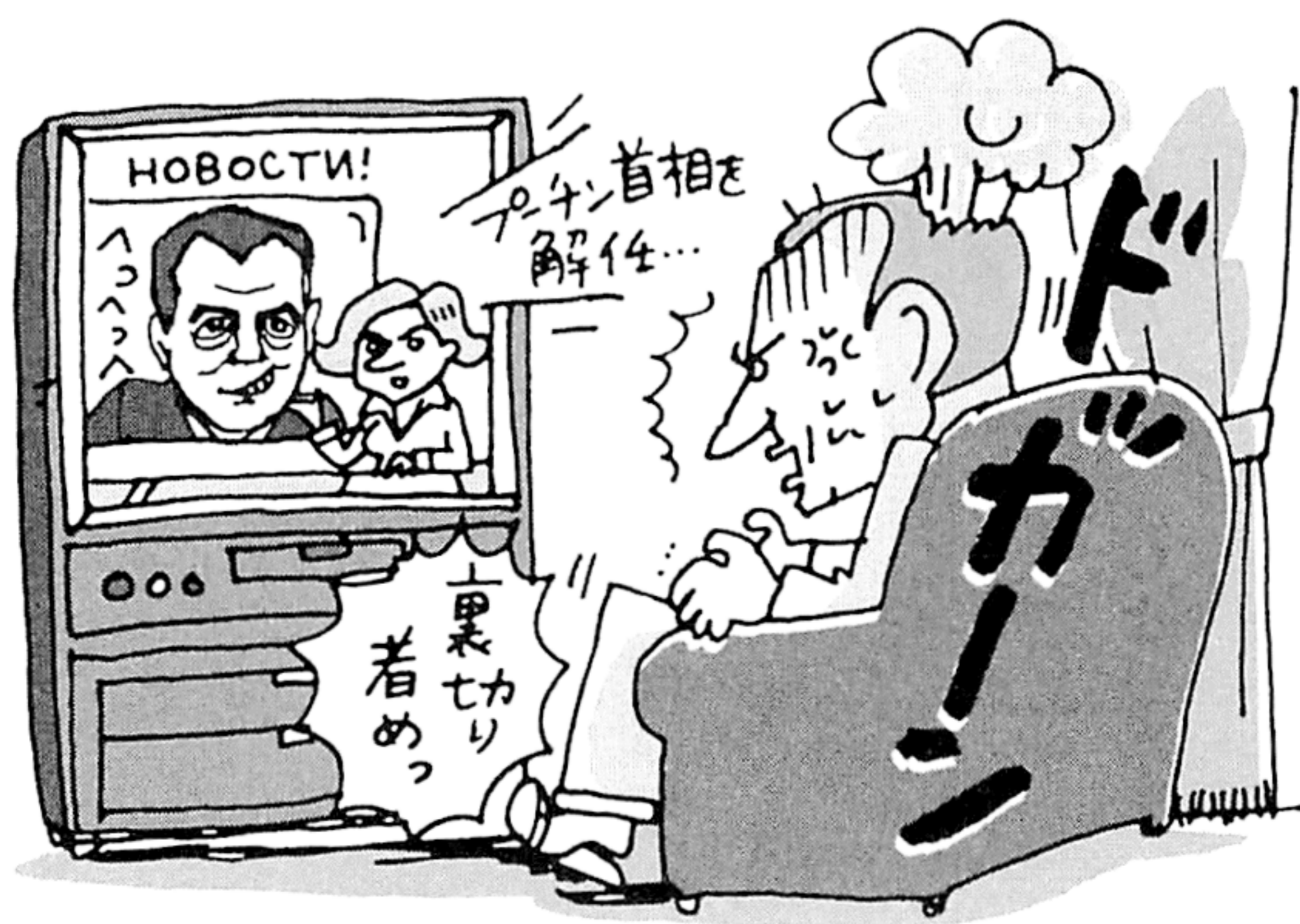
328
330 333 335 337

あとがき

341

本書のフィクション部分に登場する人物、団体、事件などは、
実在のものとは一切関係ありません。

プロローグ
ベドメーラジェフに
解任されたプーチン、日本へ！



二〇〇九年九月、プーチン電撃解任！

時は、少々さかのぼって、二〇〇八年の九月。

アメリカの一金融企業、リーマン・ショックからはじまった「世界的大不況」は、ますます猛威をふるっている。世界では、「アメリカの没落」がだれの目にも明らかになった。

一方、ライバル中国は浮上し、「G2」(二大強国)時代という言葉が頻繁に使われるようになってきている。

日本では、これまで長く日本を支配していたアメリカの傀儡政党、自民党が〇九年八月の選挙で大敗。新興勢力の民主党が念願の「政権交代」をはたし、鳥山政権が発足したばかりだった。

ちょうど同じ、〇九年夏のモスクワ。

「シイット！ ガツド！ ジュース！」

ロシア大統領ベドメージェフは、クレムリン内の執務室を歩きまわりながら、ひとり言をいっていた。

え？ なぜロシアの大統領が英語でひとり言をいうかって？

ベドメージェフは、ブログ、ツイッター、フェイスブック好きで知られている。

そして、これらを生みだしたアメリカが大好きなのだ。

ベドは、イラついている。

ロシアの状況は最悪だった。前年の〇八年秋に起こったアメリカ発「二〇〇年に一度の大不況」は、ロシア経済をも直撃している。

理由は、原油価格だ。

〇八年夏、一バレル一四〇ドル台だった原油価格は、このリーマン・ショック後、なんと三〇ドル台にまで大暴落。これが、原油依存度の高いロシアの経済に巨大な危機をもたらしていた。

「なんで、オレが大統領になったとたん、危機が起こるんだ!？」

ベドの憤りいらいらにも一理ある。

前任プーチンの時代、原油価格は上昇に上昇をつづけていた。九八年一〇ドルだったのが、なんと一〇年で一四倍にもなったのだから。

その結果、プーチン時代、ロシアのGDP国内総生産は、平均で年七%ずつ成長をつづけていた。それが、ベドの大統領就任をねらったかのような原油の大暴落。

そして、GDPは今年、新世紀になって最悪、マイナス八%前後減少すると予想されている。ロシア国民は、「やっぱりプーチンじゃなきゃダメだ! 若造わかぞうのベドじゃダメだ!」と憤っている。

「ワツキヤナイドウ、ワツキヤナイドウ?」

ベドは、うまくもない英語でこう自分自身に大声で問いかけるが、答えはいっこうに出てこない。

そんなとき、突然アメリカから電話がかかってきた。

元国務長官で、いまだに同国の政界に強い影響力を持つ、シツキンジャーからだった。

「ハロ、ベドメージェフさん、調子はどうですか？」

「ヤ~~~~~~~~ツ、フア~~~~~インツ!!!」

ベドは、(電話なのに)ニッコリ微笑みながら、大きな声で答えた。

アメリカ人から「調子はどうだい？」と訊かれたら、「親が死んでも『ファイン!』と答えろ!」。そう旧ソ連時代の学校で教わったからだ。

しかし、老練な外交官シツキンジャーは、ベドが落ちこんでいることを見抜いていた。

ベドは彼と話しているうちに、自分の正直な気持ちをどんどん打ち明けてしまった。

シツキンジャーはいう。

「ロシア経済がボロボロなのはあんたのせいじゃないよ。私がいい方法を教えてあげよう。私のいうとおりによれば、すべてうまくいく。OK?」

ベドは、アメリカ外交界の大御所のアドバイスを聞きながら、血がス~~~~ツとひいていくのを感じていた。

「ベドメージェフ大統領、プーチン首相を解任! 景気対策の失敗を理由に」

二〇〇九年九月二〇日、全世界のメディアが、このセンサーショナルなニュースをトップで報じた。

なぜセンサーショナルなのか？

前大統領のプーチンに抜擢され、いきなりロシアの政治の中枢に躍り出たベドは、プーチンに従順で、だれもがプーチンの「傀儡だ」と思っていたからだ。

プーチン自身にとっても、ベドの決断はまさに「青天の霹靂」。

しばらく、なにが起こったかが理解できなかった。

しかし、時間が経つにつれ、しだいに激しい怒りがわいてきた。

「あの野郎！ 早々に裏切りやがって！」

実をいうと、プーチンはベドが裏切る可能性を想定し、事前に保険をかけていた。

プーチンは、ロシア議会の与党「統合ロシア」のリーダーでもあった。

「統合ロシア」は〇七年のロシア下院選挙で圧勝。

四五〇議席のうち、三分の二を超える三一五議席を確保していた。

つまり、大統領弾劾手続きを開始すれば、ベドをクビにすることができるとだ。

早速、プーチンは、「統合ロシア」の本部に向かった。

プーチンの策略

「ぬわんだとおくッ!!!」

プーチンは、突然大声で怒鳴りちらした。

「統合ロシア」のN〇2ズリグロフは、恐ろしさのあまり涙目になっている。

彼は、こんな報告をプーチンにした。

「『統合ロシア』の議員のほとんどが、大統領弾劾手続きに反対しています。どうやら、ベドが買収したようです。私にも『一〇〇万ドル』でプーチンを裏切らないかという誘いがありました」

「……そんな金をいったいどこから……」

そういうと、プーチンは黙った。

プーチンとの政争に敗れ、ロンドンに逃れたユダヤ系新興財閥レベゾフスキー。

石油大手「スコユ」問題で、プーチンの政敵ルドホコフスキー社長を支援したイギリス在住のユダヤ人大富豪、ヤコブ・ロツクチャイルド卿をはじめ、アメリカ国務省等々、プーチンの失脚を望む勢力は、世界にあまりにも多い。

「……ベドは、金にはこまらねくよな……」

逆襲が絶望的であることを悟ったプーチンは、自分の未来について思いをめぐらせた。

「ベドは、俺を逮捕するだろうか……？」

プーチンは、ズリグロフの目を射るようにジッと見すえて、たずねた。

「おい。おめえは一〇〇万ドル、受け取ったのか？」

ズリグロフは、冷や汗を洪水のように流しながら、「もらうわけないじゃないですか！」と答えた。

その言葉を信じたのか信じなかったのか、プーチンは、くるりとズリグロフに背をむけた。そして、しばらく沈黙したあと突然ふりかえり、ズリグロフにむかって、ゆっくり、そし

て冷静にこういった。

「おめえは、まだ俺に忠誠を誓えるか？」

「もちろんです！ 忠誠を誓います!!!」

プーチンは、KGB流読心術で、彼の決意にウソがないことを瞬時に確信した。そして、こういった。

「おい、ズリグロフ、一〇〇万ドルもらっちまえよ！」

ズリグロフはわけがわからず、頭のなかが真っ白になった。プーチンは自分に「裏切り者」になることを勧めているのだろうか……？

「……え、いいんですか？」

プーチン、突然の政治家引退宣言

シッキンジャーにそそのかされてプーチンを解任したベドメージエフだったが、その後、「クビにしたプーチンをどうするか？」について悩んでいた。

なんといっても、プーチンはいまだにロシア国民から七〇%以上の支持率を保っている。彼の後ろには旧KGB軍団が控えているし、ロシア軍部内でも、親米ベドの人気は低く、反米プーチンの人気は高い。

「……プーチンを逮捕したら、革命が起こるかもしれない……」

ベドは、そのことを考えると、「プーチンの傀儡でいたほうがよかったかもしれん……」

と後悔した。

しかし、「トウ・ライター」。

ベドが頭を悩ませていると、電話が鳴った。大統領報道官からだ。

「大統領！　すぐテレビをつけてください！　プ、プーチンが記者会見を開いています！」
あわててテレビをつけると、画面には「生中継　プーチン緊急記者会見」の文字。

「あの武闘派オヤジ、なにをたくらんでやがる!!!」

ベドは、恐ろしさで、頭がくらくらしている。

しかし、ベドの機嫌はすぐよくなった。

記者会見で、プーチンはなんと「政治家引退」を宣言したのだ……。

「ロシア経済は〇九年、新世紀になってはじめてマイナス成長になることが確実視されている。しかも、通年でマイナス八%にもなるという予測が出ている。そして、その責任は、すべて経済運営のトップ、つまり首相だった私にある。」

あんたたちも知ってるように、私は先日、大統領から首相職を解任された。

いい機会だから、この際、政治家も辞めることにした」

会見場は騒然となった。だれも予想していなかったことが起こったのだ。

「しかしプーチン首相、いったい、引退後はどうされるつもりなのですか？」

記者たちが口々に叫んでいる。

プーチンは、不思議におだやかな顔つきで、うっすらと笑みさえ浮かべながらこう答えた。

「私は、大好きな柔道を極めたい。これからはたっぷり時間ができるだろうから、柔道の本家で親しい友人も多い日本に行き、そこでもう一度、心技体を徹底的に磨こうと思う」
会場は、また騒然。

なかには、プーチンの引退を心から喜ぶ外国人（特に米英人）記者もいて、意地悪な質問をした。

「でも、これからいったいどうやって食べていくつもりですか？」

「さあなく。日本の子供たちに柔道でも教えるか！」

プーチンは、わざとさびしそうな微笑みを浮かべながら答えた。

「イエス！ イエス！ イエ〜〜〜ス!!!」

ベドは歓喜のあまり、こぶしを握りながらこう叫び、テレビの前でクレヨンしんちゃんのように腰をふりふり、ダンスを踊った。

なんとといっても、最強のライバルが、『政治の世界から消える』というのだから。

……しかし、すぐに腰の動きがピタリと止まった。突然、ある疑念がわきあがってきたのだ。
「ずる賢いあのオヤジが、黙って消えるだろうか？ KGB出身だから油断できないぞ！」

ベドは、プーチンへの対応を協議するため、一〇〇万ドルを受け取って忠誠を示した側近たちを集めた。

「私は強いリーダーに見られたい」

ベドはいう。

「裏切り者プーチンを、黙って日本に行かせるわけにはいかない！ 私は、ヤツをひっそらえてシベリア送りにしようと思うが、諸君はどう思うか？」

すると、ズリグロフが大きな声でこういった。

「大統領！ プーチンは自分から『日本で柔道の先生になる』とっています。

これは、ヤツを国外追放にしようとする絶好のチャンスですよ！」

主体性のまったくないベドの心は、「確かにそうだよな」とゆれる。

ズリグロフは、続けた。

「大統領！ 国内には、いまだにプーチンを支持している旧KGB派、軍、内務省関係者も多い。彼らにクーデターの口実を与えないよう、表面上はプーチンと和解したことにして、うまいこと島流しにしまいましょう！」

ベドの心はこれで決まった。

元世界最強のリーダー、ついに日本へ！

〇九年九月二十九日、プーチンは政府専用機でモスクワから日本にむかうことになった。

ズリグロフはこの日、ベドに「プーチンには『死ぬまで帰ってくるなよ！』と伝えます」といい、見送り役を買って出た。

プーチンの指示で、彼の「個人諜報員」になったズリグロフ。

「日本行き」をベドに勧めたのは、プーチンを逮捕させないためだった。

「どうか、ご自愛ください……」

ズリグロフは、まわりにだれもいないことを確認してプーチンにそういった。

「おい！ しけた顔してんじゃねえよ。戦いはまだ終わっちゃいねえ。日本の温泉にっかりながら、じっくり次の作戦を考えるさ！」

プーチンは、めずらしくズリグロフにニッコリ微笑んだ。

そしてプーチンは、ズリグロフを（欧米人がよくやるように）ギュッと抱きしめると、耳元でつぶやいた。

「俺がないあいだ、ロシアを頼んだぜ！」

モスクワを出発して九時間後、専用機はついに日本に到着。

空港では、大日本柔道連盟の並みいる猛者たちがプーチンを迎えた。

そこには、プーチンの親友で、オリンピック柔道金メダリストの下山したやまもいる。

無邪気な下山は、「これからはちよくちよく稽古ができますね！」と心底うれしそうに微笑んだ。

プーチンも、「よろしく頼むぜ！ 次のオリンピックで金メダル狙うからよ」と冗談をいっただ。

プーチンは、連盟の本部「道講館」内にある豪華でだっ広い部屋を与えられ、そこで日本での生活をはじめることになった。もちろん、高価な応接セットがしつらえられ、大型テレビもインターネットも風呂もキッチンも完備された、豪奢でなに不自由のない超一流ホテルのスイートルームのような貴賓室だった。

その後は、モスクワで宣言したとおり、上段者からは熱心に柔道を学び、そして下段者にはていねいに教えている。

しかし、ソ連崩壊後経済も社会もボロボロだったロシアを復活させた彼を、日本は放っておくわけがなかった。

「『引退宣言』をしたとはいえ、ほんの少し前まで世界最強リーダーだったプーチンとの知偶をえれば、絶対に自分たちに利するなにかがあるはずだ」

そんな思いから、彼が東京にいることを知った日本の大物政治家や財界人たちは、必死で秘密裡に面会のアポを取ろうとした。

いっぽう、心中まったく「引退」したつもりのないプーチンには、彼らとの面談を断る理由はない。

むしろ、ロシアでの復活をたくらむプーチンにとって、日本のさまざま政治家や財界人の考えとホンネを知り、その実力を品定めしながら強力なコネを作っておくことは、「諜報」の観点からもまさに絶好の機会だった……。

日本、三つの選択肢

リーマン・ショック後、世界情勢は緊迫していた。

覇権国家アメリカの衰退は、もはやだれの目にも明らかだ。

いっぽう、中国はこの世界的経済危機をいち早く克服し、「一人勝ちの状態」にある。

沈むアメリカ、昇る中国。

こういう状況下で、アメリカ幕府の天領たる日本は、どこに進めばいいのか？

選択肢は三つある。

- 1 アメリカ幕府の天領でいつづける
- 2 新たな宗主国として超大国中国に乗り換えて、その属国になる
- 3 真の自立国家になる

日本の国論は割れていた。

自眠党議員の多くは、「アメリカと心中」する覚悟を決めている。あるいは、「アメリカは必ず復活する」と、強い信仰を持っている。

眠主党内では、「中国に恭順を誓おう」とする勢力が強かった。

「真の自立国家」を目指す政治家もいるにはいたが、国民の支持を得ることができず、大きな勢力にはなっていない。

そもそも、「どうやったら自立できるのか?」、その道筋を明確に示せる人がだれもいない



のだ。

それにしても、九〇年代、日本と同じくアメリカの属国だったロシアは、いかに「自立」を成し遂げたのか？

少し物事を考えられる政治家なら、だれもが抱く疑問だった。

プーチンを訪問してくる連中は、日本を代表する政治家としてのプライドだけは異常に高く、表向きは「表敬訪問」という形をとっている。

しかし、ひととおり挨拶と社交辞令を述べると、プーチンを、貴賓室の横にある小さな別室に誘った。そこで、彼らは態度を急変させてへこへこしはじめ、タイミングを見計らって、こっそりこっそり懇願するのが常だった。

「あのお、ここだけの話ですが、実はたつてのお願いがありました……」。

わが日本が自立を成し遂げる秘策を、ぜひ教えてはいただけませんか……!!」

プーチンは、そう語る男たちの目をまずは必ず鋭いまなざしで、しばしジッと見つめる。

「こいつは、俺の秘密を教えるにほんとうに値する人物かどうか？」を推しはかるのだ。

そしてほとんどの場合、プーチンはこつこつ放って門前払いしてしまう。

「そんなこと俺は知らねえ。俺はただの『柔道家』だからなあ」

しかし、ごく稀に「教えてやってもいいかもしれない」と思えるに値する人物もいた。

そんなときだけ、プーチンは口端に相手が気づきもしないほどかすかな笑みを浮かべ、ゆつくりとこつこつ語りはじめるのだった。

「……よし、あんただけには教えてやろう。日本が自立するために必要なことはな……」

第一講義

「孤立」と「自立」の どちらを選ぶか

——領土問題と外交政策



領土問題で四面楚歌の日本

「総理、いよいよ戦争かもしれないませんな……」

大野防衛大臣の言葉を聞いた矢部総理の頭のなかは、真っ白になった。

二〇一二年一二月に発足した第二次矢部内閣は好調だ。

円安で企業業績が急速に回復し、株価は上がり続けている。

内閣支持率が毎月上がるという、メッタにない現象も起きていた。

それもこれも、「景気がよくなってきた」ことによる。

矢部は笑いが止まらない。

しかし、気になることもある。

外交、安全保障問題だ。

中国・韓国との関係は「戦後最悪」。

特に中国とは、いつ戦争になってもおかしくない状況にある。

矢部は、ここ数年起こったことを思い出していた。

矢部が「自眠党」総裁に復帰した二〇一二年九月、日本はまさに「四面楚歌」状態にあった。

日中対立が激化したのは、東京都の岩原知事が一二年四月一六日、ワシントンの講演で、

「東京都が尖閣諸島を買い取ります！ 文句ありますか？」と宣言したのがきっかけだった。

中国は、これに激しく反発した。

この時点で、トラブルがあるのは、日中間だけだった。

しかしその後、問題の数はどんどん増えていく。

同年七月三日、ロシアのベドメーージェフ大統領は、二〇一〇年に続き、二度目の北方領土（国後島）訪問を断行。

日本国内で、「ベド憎しー」「ロシア憎しー」の世論が強まった。

七月八日、当時まだ政権を担っていた眠主党の田野首相は、「過激な岩原に尖閣は任せられない。戦争になる！」との配慮から、「尖閣国有化」の方針を発表。

日本としては、「中国をなだめるため」の措置だったが、反応は期待とは正反対。中国の態度は、ますます強硬になっていった。

八月一〇日、中国、ロシアと対立する日本に、新たな問題が起こる。

韓国の李大統領が、竹島に上陸したのだ。

八月一四日、李は「日王（天皇）が韓国に来たければ謝罪せよ！」と発言。

日本国民は激怒し、日韓関係は戦後最悪になった。

八月一五日、今度は香港の活動家が、尖閣に上陸。

そして、九月一日、日本政府が尖閣諸島の三島を、民間の所有者から購入すると、中国で反日デモが起こった。

このデモはこれまでにないほど大規模で、日系の商店や工場は襲撃され、放火されるケースもあった。

道に止まっている日本車は、ことごとく破壊しつくされた。

中国人はもはや、「恐くて」日本車を買うことができない。買ったとたんに、なんの理由もなく破壊される可能性が高いのだから。

中国における日本車の販売台数は、激減した。

そればかりではない。

中国は以後、軍艦まで投入し、領海侵犯を常態化させ、日本を挑発している。

眠主党の田野が総理を辞任し、自眠党が政権を奪還、そして矢部が首相になってからも状況は変わらない。いや、むしろ悪くなっているといえる。

二〇一三年一月三〇日、東シナ海で中国海軍所属のフリゲート艦「雲連港」うんれんこうが、海上自衛隊の護衛艦にむけて射撃管制用レーザーを照射するという事件が起こった。

国際社会で「照射」は、「攻撃予告」と見なされる。

「総理、いよいよ戦争かもしれないな……」

「照射」について報告に来た大野防衛大臣の言葉を聞いた矢部の頭のなかは、真っ白になった。

「どうすればいい？」

矢部は混乱している。

つい最近まで、日本国民のだれもが「戦争？　いまの時代にありえませんかよ」と考えていた。

それがいまでは、大新聞から週刊誌まで、「日中戦争になれば、日本はどうなる？」とい

った記事ばかりを載せている。

「どうすればいい……」

自分自身に何度も同じ質問を繰り返すが、一向に答えは出てこない。

「そうだ！」

どうにもわからなくなった矢部はそう叫ぶと、数人のボディガードだけを引き連れて、密かに「道講館」にむかった……。

電撃的な日本訪問以来、プーチンは、日替わり定食のようにめまぐるしく変わる「日本政治」の外にいた。

早朝から柔道の稽古をし、夕方は大好きな「一本技」をうれしそうに子供たちに教えている。子供たちは最初、プーチンのあの猛禽類もうきんるいのようにとがった風貌ふうぼうを恐がっていたが、すぐに慣れ、いまでは、プーチンのことをロシア風の愛称で「プーチカ、プーチカ」と呼んで、すっかりなついている。

〈プーチンと矢部の会話〉

プーチンは、自分の部屋のタタミの上に寝転がり、集英社の『漫画版日本の歴史』セツトを夢中になって読んでいる。

日本に来るまで、プーチンは「明治以降の日本史」にしか興味がなかった。

「なぜ、明治維新後、日本は短期間で世界五大国の一国になれたのか？」

「日本は、どうやって第二次世界大戦後『奇跡の経済成長』を成し遂げられたのか？」

この二つは、いまだ世界の関心事であり、ロシアでもくわしく研究されている。

しかし、プーチンにはいま、ありあまる時間がある。それで、維新前の歴史も勉強しておこうと思ったのだ。

日本史に登場するヒーローのなかでもっとも好きなのは、「織田信長」。

彼は、信長の性格、やり方などを見て、「自分にそっくりだ！」と思い、あらぬ妄想にふけている。

「ひょっとして、俺の前世は信長かもしれないな。」

やっぱり、明智光秀はもつとはやく処分しておくべきだったな。

ベドメージェフは、光秀の生まれ変わりに違いない。

さっさと殺しておけば、信長は天下を取れたのに……」

想像のなかでは、チョンマゲをつけたプーチン信長が大活躍している。

「トントントン」

ノックの音で、プーチンはいきなり現実に戻された。

「プーチンさん！ 矢部です！」

プーチンは、「家康が来たか！」と叫ぶと、まどろんでいたタタミから飛び起きた。

『漫画版日本の歴史』にすっかりはまっていた彼は、周囲の人間みんなに「日本史名」をつけていた。

丸顔で穏やかそうな性格の矢部は、「家康」だった。

プーチンの顔を見ると、矢部はうれしそうに微笑み、握手を求めた。

彼はこれまでも何度かプーチンと会っていたが、今日ほど「プーチンと話がしたい！」と思ったことはない。

二人が初めて知り合ったのは、二〇〇三年。矢部は当時、自民党の幹事長をしていた。

いっぽうプーチンは、「東シベリア・太平洋石油パイプライン」(ESPOパイプライン)建設で日本の協力をえるため、おおいすみ大泉内閣との関係を良好に保とうとしていた。

ESPOパイプラインは、その名のとおりに、「東シベリアの原油をパイプラインで太平洋に出すこと」を目的にしている。

いままで、ロシア産原油は主に「欧州」に輸出されていたが、このパイプラインにより、ロシアは、成長著しいアジア市場を開拓することができる。

そして、プーチンと大泉の仲介役をつとめていたのが、矢部だったのだ。

結局、さまざまな障害があり、日本が「ESPO」に協力することはなかったが、政治家としての信頼度はともかく、矢部の人間としての誠実さはプーチンの記憶に残っていた。

「プーチンさん、お久しぶりです！」

「よお！」

矢部がニッコリ微笑んでプーチンに歩み寄ると、プーチンも握手をして矢部を強くハグした。

「プーチンさん！」

矢部はいすに腰を下ろして大きくひと呼吸すると、いきなり本題に入った。

「いま、日本を取り巻く状況はとても厳しい。」

わが国は、中国、ロシア、韓国と緊張関係にあるんです！」

（筆者註…現実世界では、プーチンの意向により日ロ関係は改善しつつある。しかし、パレルワールドでは、プーチンは失脚し、ベドメージェフがいまも大統領。そのため、日ロ関係は悪いままなのだ）

「そんなに息まかなくても知ってるよ。一応ニュースぐらいは毎日チェックしてるからな」

「実は、領土問題で……」

「事情は十分にわかってる。よけいな説明はいいから、先に進んでくれ」

プーチンは、詳細を語ろうとする矢部をさえぎった。

「わが日本は、いったいこれからどうすればいいのでしょうか？」

矢部は、それまでの表情を一変させ、ほとんど泣きそうな顔をしている。

「質問が全然違うんだよね。」

『どうすればいいのでしょうか？』じゃなくて、『なんでこうなっちゃったんですか？』だろ」

「え？ そんなこと、明らかじゃないですか？」

たとえば二〇一二年の話をするれば、ロシアのベドメージェフが北方領土を訪問し、韓国の李明博イミョンバクが竹島に行き、香港の活動家が尖閣に上陸したからです」

「ちよつと待てよ、矢部さん。」

日本と中国、韓国、ロシアは、これまでも領土問題があっただろうが。でも、対立はこれほど先鋭化しなかった。

何でいまになって、急に三国との関係が悪くなったんだ？ え？」

矢部は、プーチンがいったいなにをいいたいのか理解できなかった。

「だから、中国、ロシア、韓国の人たちが、相次いで領土問題のある場所に訪問したからでしょう？」

「相変わらず、ものわがりの悪い野郎だ」と思いながら、プーチンは続けた。

「だからな、なんでこのほぼ同時期に、中国、ロシア、韓国の奴らが、領土問題のある場所を訪問したんだ？」

「……………」

矢部は沈黙するしかない。いままで、そんなことを考えたことなど一度もないからだ。

「すみません。私にはまったくわからないのです。でも、プーチンさんはご存じなので？」

「あつたり前だろが！」

「もう一度、すみません……。」

でもどうか、その理由をできるだけわかりやすく教えてもらえませんか？」

「ただ教えるだけじゃあ、つまらねえ。それより、考え方を教えてやる」

「お願いします！」

矢部は、深々と頭を下げた。

「まず、一国のリーダーたるものが絶対に知っておかなけりゃあいけない事実。それはこれだ。
世界情勢に偶然は存在しない。

すべては必然である。

俺は、ロシアの先輩政治家たちからいつもこう聞かされてきた」

「ってことは、中国、ロシア、韓国がほぼ同時に問題を起こしたのも、偶然じゃないと?」

「そのとおり」

「でもいつたい、何のために?」

「それを知るために、いい方法がある。

なにが起こったのかを、順番に並べてみることだ。

そうすると、**そこに必ず『黒幕』が見えてくる……**」

「えッ? 黒幕???」

矢部は、プーチンの思いもよらない話の展開に驚いている。

「ちよっとめんどくせえが、やってみる価値はあるぜ……!」

プーチンは机の上にあったノートパソコンを開く。

そしていつの間にか、二人は肩を寄せあい、パソコンの画面を見つめながら、ここ数年間

で起こった事件を丹念に調べ始めた……。

アメリカ一極時代の終わりが、現在の日中関係に影響を与えた

みなさん、覚えておられるでしょうか？

二〇一二年七月から九月にかけて、日本が領土問題において「四面楚歌」状態にあったことを。日本の隣国三国、中国、ロシア、韓国と極度の緊張状態にあった。

(註を加えるまでもないと思いますが、パラレルワールドで北方領土を訪問したのはベドメーリエフ。私たちの世界では、メドベージェフです)

ところで、この状況について、日本では「なぜそうなったのか？」という考察がまったく見られません。

ロシアのメドベージェフが北方領土に、韓国の李明博ミョンバクが竹島に、香港の活動家が尖閣に、いずれも一二年七月から八月にむかったのは、なにか理由があるはずです。

つまり、中国、ロシア、韓国の間「合意」があったということ。

日本と三国の領土問題は、昔からありました。

しかし、三つの問題が同時に盛りあがり、日中、日ロ、日韓の関係が急速に悪化する事態はこれまで一度もありませんでした。

いったいなにが起こったのでしょうか？

私たちは、「真の黒幕はだれか？」をはっきり知っておく必要があります。

でなければ、日本は「黒幕」の意図によって孤立させられ、またもや勝ち目のない戦争に追い込まれていく可能性がある。

第二次世界大戦前、日本を追い込んでいったのはアメリカでしたが、今回はどの国がやっているのでしょうか？

ここ数年で起こった重大事件を、思い出してみましよう。

○八年九月、リーマン・ショック。

アメリカ経済は、「住宅バブル崩壊」「サブプライム問題」でかなり悪化していましたが、「リーマン・ショック」をきっかけに、いわゆる「二〇〇〇年に一度の大不況」に突入します。

これは大げさでなく、「世界史的な大事件」でした。

これで、「二つの時代」が終わったのです。

「一つの時代」とは何でしょうか？

そう、「アメリカ一極時代」です。

第二次世界大戦終結からソ連が崩壊した一九九一年までを、一般的に「冷戦時代」といいます。別の言葉で、「米ソ二極時代」。

ソ連が崩壊し、二極の一極が消滅した。そして、世界に超大国はアメリカしかいなくなった。

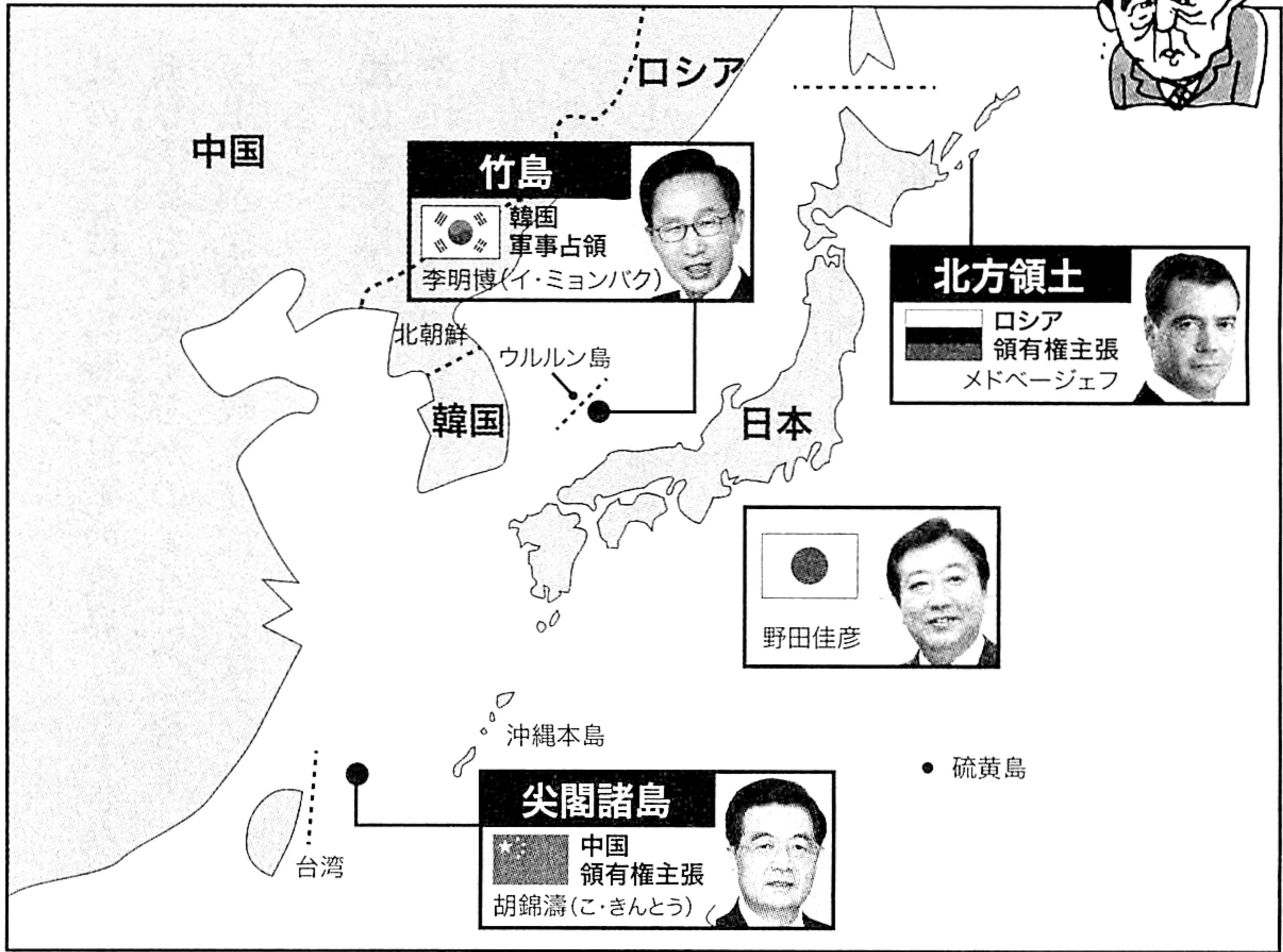
それで、「アメリカ一極時代」が到来したのです。

しかし、この「アメリカ一極時代」も、○八年に起こった「二〇〇〇年に一度の大不況」で終わりました。

ではその後、世界はいったいどんな体制になったのか？

大不況が猛威をふるったのは、翌年○九年です。

日本が抱える領土問題 (2012年9月当時)



この年、日本の名目GDPは、なんと六%も減少しています。

世界中どの国も経済が厳しかったのはもちろんですが、そのなかで際立った成長を是たした驚くべき国がありました。

それが、中国。

中国は〇九年、なんと九・二%もの経済成長をはたし、「一人勝ち」と呼ばれました。

そして、翌一〇年には、GDPで長きにわたり世界第二位に君臨していた日本を抜き、ついに名実ともに「アメリカに次ぐ超大国」に浮上します。

〇九年には、「G2^{ジョー}」という言葉が頻繁に使われました。

「これからの世界はG2、つまりアメリカと中国が引っ張っていくのだ」と。

「米中二極時代」の幕開けです。

しかし、その内実を見れば、「沈むアメリカ」「昇る中国」という関係。

このことは、当時の日本の政界にも大きな影響を与えます。

世界情勢を反映するかのようになり、「親米」自民党が没落し、「親中」民主党が浮上したのです。民主党が念願の「政権交代」をはたし、鳩山由紀夫内閣が誕生したのは二〇〇九年九月一六日のこと。

鳩山総理は、いわゆる「日米中正三角形論」の支持者でした。

それまでは、「日米安保」（＝軍事同盟）を結んでいる「日米」が緊密で、「日中」の距離はそれよりも遠かった。それを、「日米」「日中」の距離を同じにするという。

つまり、現状から見れば、「アメリカから離れ、中国に接近する」ということになります。

そして、民主党は言葉だけでなく、行動でも「中国重視」を示し始めました。

○九年一二月一〇～一三日、小沢一郎幹事長（当時）は、民主党議員一四三人、一般参加者を含めると四八三人にもおよぶ、史上空前の「大使節団」を率いて中国を訪問。

小沢氏は、胡錦濤国家主席（当時）に、「自分は人民解放軍の野戦軍司令官である」とまでいい、「中国重視」の姿勢を明確にしました。

鳩山内閣は、アメリカにとっては「最悪」、中国にとっては「最良」の政権だったのです。

日本自立のためのプーチン最強講義
北野幸伯・著

発行・集英社インターナショナル 発売・集英社
定価 1,600 円（本体）＋税
ISBN 978-4-7976-7264-0

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)